伊藤邦武先生御経歴・御業績

Ⅰ．御経歴

1949 年 10 月 4 日	神奈川県横須賀市生まれ
1968 年 3 月	神奈川県立湘南高等学校卒業
1968 年 4 月	予備校入学（翌年 3 月まで）
1969 年 4 月	京都大学文学部入学
1973 年 3 月	同哲学科（哲学）卒業
1973 年 4 月	京都大学大学院文学研究科修士課程（哲学専攻）入学
1975 年 3 月	同課程修了
1975 年 4 月	京都大学大学院文学研究科博士課程（哲学専攻）進学
1978 年 3 月	同課程単位修得退学
1978 年 9 月	アメリカ合衆国・スタンフォード大学大学院哲学科入学
1980 年 6 月	同大学院修士課程修了

Ⅱ．学位

1985 年 3 月 27 日	文学博士（京都大学）

Ⅲ．職歴

1981 年 4 月 − 1985 年 3 月	京都大学文学部助手
1985 年 4 月 − 1991 年 3 月	神戸大学文学部助教授
1991 年 4 月 − 1995 年 11 月	京都大学文学部助教授
1995 年 12 月 − 1996 年 3 月	同教授
1996 年 4 月 − 2014 年 3 月	同大学院文学研究科教授

2005 年 4 月－ 2006 年 3 月	同大学教育研究評議員
2006 年 4 月－ 2008 年 3 月	同大学院文学研究科長
2014 年 4 月－現在	京都大学名誉教授
2014 年 4 月－ 2018 年 3 月	龍谷大学文学部教授
2018 年 4 月－現在	龍谷大学文学部特任教授
2018 年 12 月 12 日－現在	日本学士院会員

Ⅳ．賞罰

2008 年 3 月 1 日	和辻哲郎文化賞
2011 年 11 月 3 日	紫綬褒章

Ⅴ．御業績

著書

1.『パースのプラグマティズム』（勁草書房、1985 年）

アメリカ・プラグマティズムの祖チャールズ・パースの思想の全貌を解明しようとした研究。筆者の博士学位論文の改訂版である。プラグマティズムは 1870 年代にアメリカのハーヴァード大学のパースを中心とする哲学者グループのなかから誕生した。その思想は、科学的実証研究と思弁的な形而上学的欲求の総合を目指すものであった。筆者はこれらの要素がパースの経歴のいかなる側面を源泉とし、その結果としていかなる体系的思想をもたらすことができたのかを、膨大な著作の全体を視野に入れて解明した。

2.『分析哲学の現在』藤本隆志との共編著（世界思想社、1997 年）

第 3 章「合理的意思決定のモデル」と「あとがき」を担当。合理的意思決定論とは、確率と効用を組み合わせることで、信念の根拠にかんして不確実

な状況下でも合理的な行為選択が可能であるという発想である。本論はその現代的な形式的モデルのいくつかを取り上げて、それぞれの長所短所を明らかにしようとした論文である。

3.『コスモロジーの闘争』編著（岩波書店、1997 年）

「岩波新・哲学講義」第 5 巻、「講義の 7 日間」と「思想史年表」を担当。7 日間の講義というスタイルで、ギリシア以来、西洋近世、現代の宇宙論にかんする哲学的議論を概観。「思想史年表」はその時代整理と関係する主要テキストの提示である。アリストテレス、パスカル、カント、パース、アインシュタインなどが扱われている。

4.『人間的な合理性の哲学』（勁草書房、1997 年）

筆者の言う人間的な合理性とは、デカルト的な合理性の概念と対比される、パスカル的な合理性の概念、すなわち蓋然性や不確実性の介入を許容するような合理性のことである。本書ではこの概念の哲学的分析の系譜を概観するが、登場する思想家は、パスカル、コンドルセ、ヒューム、ケインズ、サヴェッジ、パース、パトナムなど、近世から現代までに及ぶ。

5.『哲学に何ができるか』飯田隆、野家啓一、村田純一らと共編著（岩波書店、1999 年）

「岩波新・哲学講義」別巻、第 2 章「狐と葡萄、あるいは自己欺瞞のパラドックス」を担当。自己欺瞞とは自分にたいして自分にとって偽なる信念を抱かせようとする、パラドキシカルな精神の働きである。本論ではこのパラドックスを分析するサルトルとデイヴィドソンの理論を比較検討し、その長短を論じた。

6.『ケインズの哲学』（岩波書店、1999 年）

哲学者としてのケインズの側面を、その初期の代表作『確率論』と経済学

者としての主著『一般理論』の比較検討を通して解明した。とくに、ケインズがケンブリッジで学び交流した、ホワイトヘッド、ラッセル、ウィトゲンシュタインの理論の影響が、彼の合理性をめぐる思想にいかなる形で結実したかを分析した。

7.『偶然の宇宙』（岩波書店、2002 年）

今日のビッグバン宇宙論では、われわれの住むこの宇宙が、いくつかの物理的な意味での偶然の下で生じた世界であり、宇宙にはこの世界以外にも多くの並行宇宙や継起的宇宙が、少なくとも理論的には可能であると考えられている。本書はこの多宇宙論を支える概念的枠組みを分析し、蓋然性や人間原理など、今日の宇宙論において必須となる概念の明確化を試みた。

8.『パースの宇宙論』（岩波書店、2006 年）

パースが構想した数学的形而上学としての宇宙論の内容を分析した研究。数学的形而上学とは、算術や幾何学を総合して一般化するために、彼が考案した図像的論理学を下敷きにして、世界の存在論的構造とその発展の論理を形式的に明らかにしようとしたものである。その図像的論理学は今日の位相幾何学に通底するものであり、その宇宙論は今日のビッグバン宇宙論の原型となるものである。

9.『社会の哲学』編著、（中央公論新社、2007 年）

「哲学の歴史」シリーズの第 8 巻、「総論」、第 9 章「アメリカン・プラグマティズム I」を担当。総論では 19 世紀フランス、イギリス哲学の主たる思想潮流を概観し、第 9 章ではパースとジェイムズの思想形成と理論体系について概観した。

10.『宇宙を哲学する』（岩波書店、2007 年）

著書 3 の『コスモロジーの闘争』の改訂増補版。「講義の 7 日間」にたい

して、「補講の 3 日間」を追加し、19 世紀から 20 世紀における宇宙論哲学の問題意識をさらに深めた。宇宙の空間時間にかんする有限論・無限論の対立が議論の軸になっている。

11.『いま「哲学する」ことへ』飯田隆、井上達夫、熊野純彦らと共編著（岩波書店、2008 年）

「岩波講座　哲学」の第 1 巻、第 2 章「理性と非理性」を担当。現代哲学における「非理性」の取り扱いについて、ニーチェ、フーコーなどを題材に論じ、古典時代におけるパスカルの理性論との関係についても言及した。

12.『科学 / 技術の哲学』飯田隆、井上達夫、熊野純彦らと共編著（岩波書店、2008 年）

同じく「岩波講座　哲学」の第 9 巻。この巻の主たる編集者として「展望」を担当。従来の哲学では科学と技術は重なる点もあるが異なった知的活動とされてきた。この点が現代哲学ではどのように変更され、それによってどのような問題意識が生まれることになったのかを論じた。

13.『ジェイムズの多元的宇宙論』（岩波書店、2009 年）

ジェイムズの形而上学は多元論である。これは真理についての多元性を認めるとともに、宇宙の進行に応じて真理そのものが変貌する可能性をもつことも主張する形而上学である。ジェイムズはこの主張のために、人間の意識の同一性や人格の本性をめぐる新しい理論を構築した。本書はその内容を吟味することで、意識の流れを基礎とする宇宙論とはどのようなものとなりうるかを解明している。

14.『経済学の哲学』（中公新書、2011 年）

エコノミーとエコロジーの共存は可能なのか。この問題を追及するために、19 世紀イギリスの特異な思想家であるジョン・ラスキンの功利主義的経済

学にたいする鋭利な批判を取り上げて、その議論の内容と後世への影響を確認した。併せて、ラスキンの批判となっている経済学の哲学的基礎について、プラトン、アリストテレスからスミス、リカード、マルサス、ミルまでを概観した。

15.『物語　哲学の歴史』（中公新書、2012 年）

古代から現代までの哲学にかんする新書版の通史。併せて哲学の歴史の運動をどのように理解するべきかという問題についても追及している。哲学史については、ヘーゲル的な進歩の歴史という見方や、ローティ流の「哲学の終わり」という見方もあるが、本書は古代からの歴史を螺旋的な運動にたとえて、今日の哲学の問題意識が古代以来の「魂」の問題に向かっていることを論じた。

16.『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』（ぷねうま舎、2014 年）

九鬼周造は 7 年以上にわたるフランス・ドイツ留学を終えて、京都大学に赴任する直前に、独自の形而上学的時間論をフランスで発表した。それはベルクソンやハイデガーに反対して、東洋的な輪廻の時間論の可能性を模索するものであった。九鬼はこのようなヴィジョンを提示するために、古代インド思想を応用するとともに、当時の現象学や物理理論を援用した。本書はその内容について、歴史的、論理的の両面から立体的な理解を試みたものである。

17.『プラグマティズム入門』（ちくま新書、2016 年）

プラグマティズムは 19 世紀後半にアメリカで誕生したのち、20 世紀の一世紀を通じて幅広く世界に受け入れられ、今世紀に入ってからも多くの共鳴する思想家を生み出している。本書はこの思想の歴史を通覧するとともに、今日の研究動向についても概観し、この思想がもつ潜在的な力について多角的に考察したものである。

18.『哲学ワールドの旅』藤本忠らとの共編著（晃洋書房、2018 年）

言葉を暗記するだけでなく、自分で、そして皆で考え、悩み、「哲学的な考え方」を身につけるための入門書。全 13 章の内、以下の 3 章を分担執筆した。「第 4 章　現代哲学　人間にとっての世界と言語」、「第 8 章　現代哲学　実存と徳ということ」、「第 10 章　芸術と哲学　美の意味を考える」。

19.『フランス認識論における非決定論の研究』（晃洋書房、2018 年）

19 世紀後半から第一次世界大戦までのフランスの哲学の内に明瞭に認められる、決定論的自然観・人間観へのラディカルな批判運動の内実を、包括的に解明しようとした哲学史研究。扱われる中心的な思想家はブートルー、ポアンカレ、デュルケームであるが、それに先行するクールノー、ルヌーヴィエについての研究も含む。また、ブートルーと九鬼周造の理論的関係にかんする研究も含む。この運動にはアメリカのプラグマティズムとの連携も含まれるため、その側面についても分析する。これまでこの思想運動にかんする全体的研究は、わが国ではまったくなされていない。

20.『宇宙はなぜ哲学の問題になるのか』（ちくまプリマー新書、2019 年）

西洋哲学の中心的課題を、「宇宙の中の人間の位置の探究」とし、その具体的な現れを、プラトン、カント、ウィトゲンシュタインなど、西洋哲学の代表的思想家において確認したもの。

学術論文

1.「『論理哲学論考』における「思考」と「自我」」（『哲学論叢』5 号、京都大学文学部哲学教室、1978 年）

ウィトゲンシュタインの前期主著における哲学思想を理解するために、論理空間内における事態の描出という意味での思考作用と、その可能性の限界としての自我概念を解明した。

2.「パースの記号論的認識論」(『哲学論叢』7 号、1980 年)

パースはその最初期の哲学理論において、反デカルト主義的な認識論を展開するために、記号に媒介された精神としての自我という概念を提起するとともに、直観や内観の可能性の否定を主張した。本論はこの初期認識論の概観である。

3.「パースの科学的探究の基礎づけ」(『思想』683 号、岩波書店、1981 年)

プラグマティズムの思想を確立したパースは 1870 年代に「科学の論理の解明」という名の論文シリーズを発表した。反デカルト主義に立つパースがどのような方法で科学の基礎づけを行うのか。本論は演繹、帰納、仮説形成という 3 種類の推論の複合によって、科学の信頼性を確保するというパースのアイデアを解明した。

4.「クワインの「自然化された認識論」」(『理想』590 号、理想社、1982 年)

クワインはその第二の主著である『ことばと対象』において、「存在論的な不確定性」というユニークな理論を主張するともに、従来の第一哲学という哲学観が廃棄されるべきであり、哲認識論は自然科学に接続する仕方で「自然化」されるべきであると論じた。本論はこの理論を批判的に吟味する。

5.「探究と倫理――パースにおけるプラグマティズムと規範学の理論」(『哲学研究』47-6 号、京都哲学会、1983 年)

パースのプラグマティズムは基本的に科学的探究を人間の知的営みの中心にすえる理論であるが、同時に科学と道徳論、美学との連続性を主張する理論でもある。その基礎にある「規範学」という発想を解明しようとしたのが本論である。

6.「記号と意味」、『記号　論理　メタファー』（「新岩波講座　哲学」第3巻、岩波書店、1986年）

言語記号と意味の関係は言語哲学の中心問題である。この論文では、ソシュール、ウィトゲンシュタイン、クワインの説を検討し、それらに共通の記号理解を指摘する。

7.「パースの意味分析」（『神戸大学文学部紀要』14号、1987年）

パースの意味分析は一般に「プラグマティックな意味分析の格率」として知られる。それは平叙文の意味を条件文へと解釈しなおす方法であるが、いくつかの理論的困難を内包している。その問題を整理する。

8.「隠喩としての自然――ケプラーのメタ・アブダクション」（『科学哲学』20号、日本科学哲学会、1987年）

ケプラーにおける惑星の楕円軌道の発見の過程には、「観察データと仮説との間の隠喩関係」という記号論的視点が生かされていた。この点をケプラーの『新天文学』の議論の分析を通じて明らかにした。

9.「記号論」（『哲学とはなにか』竹市明弘・常俊宗三郎編、勁草書房、1988年）

論文6の延長上にある主題を、哲学の入門書のために概説したもの。ソシュール系統の記号論の考えとパース系統の記号論の系統の間にある、共通点と相違点を指摘した。

10.「ウィトゲンシュタインにおける言語の自律」（『自然観の展開と形而上学』井上庄七・小林道夫編、紀伊国屋書店、1988年）

ウィトゲンシュタインの言語哲学は、一般に『論理哲学論考』の言語画像説と『哲学探究』の言語ゲーム理論との間に大きな断絶があるとされている。しかし、これらの間には共通点もあり、そのもっとも重要な思想が「言語の自律」という発想であることを解明した。

11.「技術的探究について」(『関西哲学会紀要』22 号、1988 年)

デューイの『論理学―探究の理論』における探究の技術的性格の分析が、今日的な技術革新において、どのような形で具体化されているかを検討した。

12.「パラダイム論の展開」(『科学と哲学』内井惣七・小林道夫編、昭和堂、1988 年)

パラダイム論は科学史家のトマス・クーンが展開した科学の進展の論理にかんする図式である。この図式は非常に広範囲に応用される一方で、概念的な曖昧さにかんする多くの不満を招いた。本論では、クーンによるパラダイムという概念の多様な用法を整理し、その核心がどこにあるのかを分析した。

13.「意味と真理――デイヴィドソンの言語哲学」(『愛知』5 号、神戸大学文学部哲学研究室、1989 年)

デイヴィドソンの意味の理論はクワインの行動主義的意味分析を超越論的方向に変形したものである。本論はその概略を我が国ではほぼ最初に紹介した論文である。

14. “Communication and Its Consummatory Nature”, (*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.7, Centre international pour étude comparée de philosophie et d'esthétique, Tokyo, 1989)

「哲学美学比較研究センター」は、哲学と美学にまたがる国際研究センターであり、その軸となる思想は来るべき世界におけるエコ・エシックスの提唱にある。本論はその紀要に発表したもので、論文 11 でも論じたデューイの探究の理論を、コミュニケーション論として解釈したものである。

15.「意味とコミュニケーション」(『現代哲学のフロンティア』神野慧一郎編、勁草書房、1990 年)

論文 6, 13, 14 などで扱ったさまざまな意味理論について、その概略を、現

代哲学の展望を趣旨とする論文集に寄稿したもの。

16.「早く来すぎた記号論者――C. S. パース」(『命題コレクション・哲学』坂部恵・加藤尚武編、筑摩書房、1990 年)

論文 2 で論じたパースの記号論的認識論を反デカルト主義として解釈。テキストを引用して、その要点を整理した。

17.「言語と自由」(『制度と自由』、「現代哲学の冒険」第 13 巻、岩波書店、1991 年)

言語とは基本的に文法や音声の規則に支配された現象である。この規則支配的な基盤のなかで発話の自由はどのように確保されるのか。この問題をウィトゲンシュタインやチョムスキーなどの言語論を参照しつつ考察した。

18.「ウィトゲンシュタイン」(『現代哲学のバックボーン』神野慧一郎編、勁草書房、1991 年)

論文 15 の姉妹編にあたる論文集に寄稿したもの。現代哲学の主要な思想家の一人として、ウィトゲンシュタインを取り上げ、その思想の全体像を描いた。

19.「科学の客観性と相対性」(『数学セミナー』361 号、日本評論社、1991 年)

論文 12 で論じたパラダイム論について、それが科学の客観性と相対性についてのいかなる理解をもたらすのかを論じた。

20. “Fission of Personal Identity?”, (*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.9, 1991)

現代哲学における人格の同一性をめぐる議論を取り上げ、特にイギリスのパーフィットの理論において、一個の人格が多重実現する可能性が論じられている点に注目し、ヒュームや仏教思想との共通点を指摘した。

21.「パットナムの機能主義批判」(『哲学論叢』19 号、1992 年)

ヒラリー・パットナムは現代アメリカを代表するネオ・プラグマティストの一人である。彼は心の哲学における機能主義の提唱者としても知られているが、この立場の自己批判を通じて、より自然主義的な哲学へと移行した。この自己批判の論理を解明する。

22.「合理性の自然化」(『科学哲学』25 号、1992 年)

認識論の自然化という発想は、論文 4 で論じたクワインの自然化された認識論の文脈でさまざまに議論されている。しかし、人間の合理性にかんする自然主義的説明、つまり心理学的記述のみによる説明は可能なのか。本論ではこうした発想にたいする批判を行った。

23. “The Cost of Conflict: A Note on Risk Analysis”, (*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.10, 1992)

今日の論理学の分野においては、不確実な状況の下でのリスクの推定を行うリスク・アナリシスにかんして、形式的な研究が行われている。本論ではこうした形式化の前提となるリスクや不確実性の概念について、批判的に吟味する。

24.「言語ゲーム――ウィトゲンシュタイン」(『現代哲学を学ぶ人のために』丸山高司編、世界思想社、1992 年)

論文 10、18 などと重なるウィトゲンシュタインの言語哲学の全貌の概観。

25.「哲学と民主主義――ローティの「政治としての哲学」をめぐって」、『理想』651 号、1993 年)

パットナムと並ぶ現代のネオ・プラグマティズムの代表的思想家ローティについて、その民主主義論を検討する。ローティはアメリカの代表的政治哲学者ロールズの議論を援用して、民主主義には哲学的基礎づけが不必要であ

るとする。本論ではこの議論を批判する。

26.“Philosophy and Democracy: On Rorty’s Proposal”,（*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.11, 1993）

上の論文 25 の英語版。

27.「プラグマティズムの源流」（『分析哲学とプラグマティズム』、「岩波講座　現代思想」第 7 巻、岩波書店、1994 年）

現代のネオ・プラグマティズムに対比される古典的プラグマティズムとしてのパースとジェイムズの思想の特徴を描き出す。

28. “Peirce and Davidson: Man is His Language”,（G. Debrock and M. Hulsuit, eds., *Living Doubt; Essays concerning the Epistemology of C. S. Peirce*, Dordrecht, Kluwer Academic Press, 1994）

ハーヴァード大学で行われた大規模なパース生誕 150 年記念国際集会からは、成果として何冊かの研究書が生まれた。本論文はその一冊であるパースの認識論にかんする論文集に収められたもの。パースの記号論的認識論を現代のデイヴィドソンの言語哲学と比較検討している。

29. “Prisoner’s Dilemma and Common-sense Morality”,（*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.12, 1994）

現代の倫理学においては、さまざまな道徳的なディレンマをゲーム理論の視点から分析する手法が示されることがある。しかし、競争的ゲームを下敷きにしたディレンマの分析の有効性は決して自明ではないことを論じる。

30.「デカルト」（『西洋哲学史・近代編』宗像恵・中岡成文編、ミネルヴァ書房、1995 年）

西洋哲学史の近代編において、その中心的役割を演じるデカルト思想の輪

郭を明らかにした。

31.「デカルト批判・私的言語の議論」(『ウィトゲンシュタイン読本』飯田隆編、法政大学出版局、1995 年)

ウィトゲンシュタインの言語ゲーム理論には、私的言語の批判という議論が含まれている。一般にこの議論はウィトゲンシュタインの反デカルト主義を示すものとされているが、本論では、ウィトゲンシュタインとデカルトの関係はより複雑なものであり、言語ゲーム理論は必ずしも反デカルト主義とは言えないということを論じた。

32. “Peirce’s Wager: The Rationality of Decision Making under Uncertainty”,(*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.13, 1995)

著書 2『人間的な合理性の哲学の』の最終章「パースの賭け」の英語版。パースは不確実な確率を根拠に賭けを行うことの合理性について、哲学的な反省を行っている。本論はその骨格を明らかにしている。

33.「ケインズとラムジー――確率と合理性をめぐって」(『京都大学文学部研究紀要』35 号、1996 年)

ケインズは『確率論』における確率的判断の論理の体系化について、ケンブリッジの後輩であるラムジーによる強力な批判を受けた。その結果としてケインズはいかなる点で自説を改め、いかなる点でラムジーとは別の方向を模索することになったのか。ケインズの確率論の変遷を分析した。

34.「哲学の多元化」(『アルケー』4 号、関西哲学会、1996 年)

現代哲学の多様性にかんするシンポジウムでの発表原稿。主として現代アメリカのネオ・プラグマティズムを代表するローティの立場を取り上げて、その批判的吟味を行った。

35.「パスカルの賭け」(『人間存在論』3 号、京都大学大学院人間・環境学科哲学教室、1997 年)

パスカルの『パンセ』における有名な「無限・無」において展開された、「神の存在へと賭けることの合理性」という論理にかんして、現代哲学におけるさまざまな評価について考察した。

36.「ケインズの哲学思想の発展」(『哲学研究』563 号、1997 年)

著書 6『ケインズの哲学』での分析を要約的に発表した論文。

37. "Concept's Double Face",(*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.15, 1997)

思考における心的アイテムとしての「概念」の分析にかんして、ウィトゲンシュタイン流の「家族的類似性」説と、フーコーやクーン流の「パラダイム」説という、2 つの代表的な分析モデルがある。概念はしかし、これら双方の分析をともに許容するような両面性をもつ、というのが本論の結論である。

38.「ウィトゲンシュタインの最後の言語哲学」(『人間存在論』4 号、1998 年)

ウィトゲンシュタインの最後の著書『確実性の問題』は、一般にデカルトの普遍的な懐疑の議論を批判したものと認められているが、その内容は必ずしも単純なものではない。論文 31 の議論の延長として、ウィトゲンシュタインとデカルトの思想の複雑な関係について光を当てている。

39.「デカルトとパース」(『デカルト読本』湯川佳一郎・小林道夫編、法政大学出版局、1998 年)

デカルトをめぐる啓蒙的研究書において、デカルトと現代思想との比較を行っている後半部の中の一章。パースの反デカルト主義がどの程度まで妥当なものであるのかを論じた。批判の主題は主として方法論的懐疑論の妥当性

とコギトの確実性にかんしてである。

40. “Keynes’ Methodology of Science”,（*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.16, 1998）

著書 6『ケインズの哲学』の後半部、ケインズの科学方法論を論じた部分について、その概略を英語版として発表した。

41.「「新世界」の自己意識」（『「哲学」――「知」の新たな展開』大橋良介・野家啓一編、ミネルヴァ書房、1999 年）

アメリカのプラグマティズムはいかなる精神的土壌から生まれてきたのか。それをヨーロッパと対比される意味での「新世界」という自己意識の側面から分析した。

42.「ラムジー」「『哲学的文法』」「言語の自律性」（『ウィトゲンシュタインの知 88』野家啓一編、新書館、1999 年）

ウィトゲンシュタインの思想事典において、上記の 3 項目を担当。

43.「哲学よさらば？――和田純夫『20 世紀の自然観革命』を読んで」（『PROSPECTUS』2 号、京都大学文学部哲学教室、1999 年）

20 世紀の自然観革命は相対論と量子力学の誕生によって代表される。これらの物理学の革命は、従来の哲学の見直しを迫るものであるが、それは哲学の廃棄にまで結びつくものなのか。この点について、本論は和田氏の考えを批判する。

44. “‘Limitology’ at the End of the 20th Century”,（*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.17, 1999）

20 世紀末の思想界においては「科学の終わり」や「世界の終わり」など、さまざまな「終焉」説が提示された。これらの思想に潜む「発展の極限とし

ての終焉」という論理を、科学哲学的視点から批判的に検討する。

45.「ウィトゲンシュタイン」(『哲学を読む』大浦康介、小林道夫、富永茂樹編、人文書院、2000 年)

哲学史上の代表的な思想について概説したアンソロジーの一章。論文 18 などと重なる内容であるが、一般読者のためにより平易な文体で解説した。

46. “The Return of the Anthropocentric Universe”,(*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.18, 2000)

「人間原理」とは今日の量子力学的宇宙論において、この現実の宇宙の特性を説明するために要請されるとされる、一種の哲学的仮説である。本論ではこの仮説の根拠について批判的に吟味している。

47.「科学の変貌」、『新コペルニクス的転換』(「20 世紀の定義」第 5 巻、岩波書店、2001 年)

20 世紀の科学革命は新しいコペルニクス的転換ともいえる出来事である。これをどう理論化するかということが、ポパー、クーン、ファイヤーアーベントらによって論じられた。その内容を整理して、問題点をも指摘した。

48.「ヒュームの確率論」(『哲学論叢』28 号、2001 年)

ヒュームの代表作『人間本性論』には彼独自の確率論が含まれている。その理論が、因果性や帰納的推論をめぐる彼の懐疑論などにどのように生かされているのかを分析した。

49.「ヒュームの奇跡批判」(『哲学研究』573 号、2002 年)

ヒュームの宗教論にはいくつかの奇跡概念の批判が含まれている。それらの議論が彼の確率論とどのように結びついているのかを分析した。

50.「会話の原則と含意」(『言語哲学を学ぶ人のために』野本和幸・山田友幸編、世界思想社、2002 年)

この著作は現代の言語哲学の諸理論について、その入門的な説明を集めたものである。本論はその一章として、イギリスの言語哲学者グライスの立場を概説したものである。我が国のグライス紹介としてはほぼ最初のものである。

51.「懐疑論の効用――ヒュームの場合」(『人間存在論』9 号、2003 年)

ヒュームはデカルトとは異なる角度から懐疑論を展開したが、その意義はデカルトほど明確には述べられていない。本論は彼のラディカルな懐疑論の動機を、『人間本性論』などの議論から解明する。

52.「自然主義的認識論と懐疑論――ヒュームの場合」(『哲学』54 号、日本哲学会、2003 年)

ヒュームの認識論は現代のクワインなどの自然主義的認識論と共通点が多いとされる。しかし、懐疑論の強調という意味で、ヒュームの立場は単純な自然主義的認識論とは一線を画している。本論ではその理由を探る。

53.「ヴィジョンとしての宇宙論――チャールズ・パースと「スフィンクスの謎」(1)」(『PROSPECTUS』7 号、2003 年)

著作 8『パースの宇宙論』の第 1 章のスケッチというべき論文。

54. “Miyazawa Kenzi and ‘Silver Monads’”, (*Acta Institutionis Philosophiae et Aestheticae*, vol.21, 2003)

宮澤賢治は『春と修羅』の序文などで、自分の宇宙観を提示するためにライプニッツのモナド論などを応用しているが、その詩的ヴィジョンを哲学の議論で敷衍するとどのようなものになりうるかを、一つの仮説として提出する。

55.「ケインズの実践哲学」(『経済学史学会年報』45 号、2004 年)

日本経済学史学会の年報に、著書 6『ケインズの哲学』の要約的解説を掲載した。

56.「ヴィジョンとしての宇宙論――チャールズ・パースと「スフィンクスの謎」(2)」(『PROSPECTUS』8 号、2004 年)

論文 53 の続編。

57.「宇宙における時間の誕生」(『現代思想』33-11 号、青土社、2005 年)

上記雑誌の宇宙論特集に寄稿した論文。宇宙の誕生と時間の誕生の関係にかんして、ビッグバン宇宙論とパースの宇宙論の議論を比較する。

58.「チャールズ・パースの「アガペー主義」」(『宗教哲学研究』23 号、京都宗教哲学会、2006 年)

パースは自分の思想体系を偶然主義、連続主義、アガペー主義の 3 つの柱からなると言っている。3 番目のアガペー主義は彼の宗教思想であるとともに、心身の結合にかんする存在論的理論でもある。彼の哲学のこれらの側面について分析した。

59.「唯名論と実在論」(『大航海』60 号、新書館、2006 年)

上記雑誌の中世哲学と実在論の特集に寄稿したもの。パースの形而上学がいかなる意味でスコラ的実在論、特にスコトゥスの形而上学と重なるものであるかを論じた。

60.「ジェイムズと西田幾多郎――その経験概念をめぐって」(『日本の哲学』7 号、昭和堂、2006 年)

ジェイムズと西田はともに純粋経験を基礎にした存在論を展開した。本論はこれらの理論の形成にかんする歴史的事情を解明するとともに、その理論

的相違の核心を解明しようとした。

61.「パースの宇宙論・補遺」(『アルケー』15 号、2007 年)
関西哲学会大会において、口頭発表として、著書 8『パースの宇宙論』の内容を概観するとともに、そこでは論じることのできなかった面についても補足説明したものを、学会の年報に掲載した。

62.「哲学はいま」(野家啓一、茂木健一郎、西垣通との座談会、『図書』710 号、岩波書店、2008 年)
「岩波講座　哲学」シリーズ発刊を記念して行った座談会の記録。現代哲学の方向にかんする意見を述べた。

63.「科学の進歩ということ」(『科学』79-1 号、岩波書店、2009 年)
上記雑誌のノーベル賞特集に寄稿して、現代の哲学的観点から見た「科学の進歩」の意味を論じた。

64.「意識と人格」(『大航海』69 号、2009 年)
上記雑誌の「脳・意識・文明」特集に寄稿して、ジェイムズ的な無意識論や多重人格論の新しさについて指摘した。

65.「『確率論』のパースペクティヴ」(『現代思想』37-6 号、2009 年)
上記雑誌のケインズ特集に寄稿して、彼の処女作である哲学書『確率論』の概説と今日的意義について論じた。

66.「ケプラーと天文学的仮説の真理」(『現代思想』37-12 号、2009 年)
上記雑誌のガリレイ特集に寄稿して、ガリレイに匹敵するケプラーの科学精神の重要性を論じた。

67.「ラスキンの藝術経済論（1)」(『哲学論叢』36 号、2009 年)

19 世紀イギリスの特異な思想家・美術評論家ラスキンには『藝術経済論』という著作がある。本論ではこの作品の思想と、『この最後の者にも』などに見られる彼のミル、リカード批判との結びつきについて解明する。

68.「ラスキンの藝術経済論（2)」(『哲学論叢』37 号、2010 年)

論文 67 の続編。

69.「哲学史と経済学」(『経済学のエピメーテウス』丸山徹編、知泉書館、2010 年)

経済史家高橋誠一郎の生誕 125 周年記念論文集。高橋は経済史家としてプラトン、アリストテレス、トマス、ヒュームなど、さまざまな哲学者の経済理論を紹介した。その業績の意味について考察した。

70.「『視霊者の夢』の周辺で」(『別冊　水声通信』1 号、水声社、2011 年)

『視霊者の夢』は 18 世紀の思想家スウェーデンボルクが発表した神秘思想書である。この作品はカント哲学に非常に大きな影響を及ぼしただけでなく、パースにとっても重要な意味をもっていた。この点をパースのアガペー主義などとからめて説明した。

71.「資本主義のヴィジョンをめぐって」(『危機の中で「ケインズ」から学ぶ』ケインズ学会編、作品社、2011 年)

第 1 回日本ケインズ学会のシンポジウムにおいて発表した内容を論文集に収録したもの。ケインズの資本主義にたいする批判的視点が今日の金融資本主義にたいしていかなる意義をもちうるかを検討した。

72.「自覚と自己表現的体系」(『日本の哲学』12 号、2011 年)

『善の研究』以降における西田幾多郎の「自覚」の論理と、ドイツの数学

者デデキントやアメリカの哲学者ジョサイア・ロイスの自覚論との関係を分析した。

73.「パースのデカルト批判」(『デカルトをめぐる論戦』安孫子信・出口康夫・松田克進編、京都大学学術出版会、2013 年)

論文 39 と重なるテーマであるが、ここではパースによるデカルト的な神概念にたいする批判に焦点を当てた。

74.「プラグマティズムとギブソン」(『身体　環境とのエンカウンター』佐々木正人編、「知の生態学的転回」第 1 巻、東京大学出版会、2013 年)

ボイス・ギブソンは今日のエコロジカルな心の哲学という立場の創始者とみなされている。その思想がジェイムズのプラグマティズムをどのように継承したものであるかを検討した。

75.「エコ・エコノミクス的思想の先駆者ジョン・ラスキンを紐解く」(『環境会議』、2013 年秋号、宣伝会議、2013 年)

上記雑誌の「環境配慮」特集に寄稿したもの。著書 14『経済学の哲学』のラスキンを概括的に示した。

76.「解説」(『哲学の三つの伝統』野田又夫著、岩波文庫、2013 年)

野田又夫は世界と日本の哲学史を通覧し、そこから哲学とは何かを根本的に考えようとした思想家である。本論は野田の代表的著作について、その論旨を解説するとともに、野田が直に学んだ京都学派の哲学にかんする諸論考を、その特徴と意義の面から解明した。

77.「九鬼周造と輪廻の時間論」(『哲学研究』597 号、2014 年)

前年の京都哲学会大会で発表した原稿。著書 16『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』で分析した九鬼のフランスにおける時間論の輪郭を示した。

78.「九鬼周造の解脱観」(『臨床精神病理』35-1 号、日本精神病理学会、2014 年)

著書 16 の九鬼論の最終章、九鬼の輪廻と解脱の思想にかんする内容を、精神病理にかんする学会で紹介するとともに、人間精神の分析として有するであろう意義についても述べた記録である。

79.「プラトンと現代科学」(『プラトンを学ぶ人のために』内山勝利編、世界思想社、2014 年)

プラトン思想にかんする啓蒙的入門書に寄稿したもの。プラトン『ティマイオス』の宇宙論の構想がどのような形で現代においても生きているかを論じる。

80.「フィクションの世界とは何か」(『龍谷哲学論集』29 号、龍谷哲学会、2015 年)

今日の分析哲学においては、形式的な様相論理を基礎においた形而上学の構築という方向に注目が集まっている。本論はこの方向を現実世界と文学的虚構世界の区別に適用した理論モデルを検討し、フィクション論としては不十分であることを論じる。

81. “On Mental Causation”,(Antonio Manuel Martins, ed., *Cause, Knowledges and Responsibility*, Wien, LIT, 2015)

心身問題における難問の一つは精神から身体への因果作用(たとえば意志の作用)をどう理解するか、という問題である。今日の脳科学の場面でこの問題を考える一つの可能性として、「複雑なものからより単純なものへの下降的因果」という発想を採用する道があるということを論じる。

82.「今日のプラグマティズムの一側面」(『現代思想』43-8 号、2015 年)

上記雑誌の特集「いまなぜプラグマティズムなのか」に寄稿したもの。21

世紀に入ってからのプラグマティズムの動向について概観している。

83.「分析哲学から経済学へ――ケインズ思想の潜在力」(『資本主義経済システムの展望』、「岩波講座　現代」、第3巻、岩波書店、2016年)

ケインズの抱いた資本主義経済についての批判的意識を現代においてどう評価し、生かすべきなのか。本論はこの点をポストモダニズムとウィトゲンシュタインの哲学という2つの思想をからめて解明している。

84.「ポアンカレと数学的真理の厳密性――『科学と仮説』を読む」(『龍谷大学論集』487号、2016年)

ポアンカレの数学の哲学の立場は一般に規約主義と呼ばれているが、その理論の奥行きは非常に複雑である。『科学仮説』における「規約」の意味を厳格に理解し、数論、幾何学、力学におけるその用法の相違を整理する。また、彼自身が自説を「プラグマティックな観念論」と呼んでいることの意味を改めて考える。

85.「アリストテレスの経済思想再考」(『経済研究』、67-2号、2016年)

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』における正義論のなかでも、商業的交換における正義、いわゆる交換的正義については、その解釈にかなりの幅がある。本論ではいくつかの代表的な解釈を概観したあと、その近代哲学における影響関係をホッブズやヒュームにおいて検討する。

86.「数理思想からみた田辺元の西田哲学批判」(『哲学研究』600号、2016年)

田辺元の晩年の数理思想研究の代表作『数理の歴主義展開』をとりあげ、そこに見られる西田哲学批判の要点を明らかにする。数理哲学にかんして両者はポアンカレの直観主義を奉じるところから出発した。しかし、その後西田は無限論を集合論の立場から論じるようになり、田辺はその限界をポアンカレ本来の位相幾何学の立場から指摘している。彼の批判には今日的意義が

認められる。

87.「九鬼周造とブートルーの偶然論」(『理想』698 号、2017 年)

九鬼周造の『偶然性の問題』は、エミール・ブートルーの自然法則の非決定性についての研究を、目的論的偶然論として特徴づけ、自らの立場をこれに対立する実存的・形而上学的理論としている。しかし、九鬼の理論を詳細に検討するとそこにはブートルーの形而上学の影響もあることが判明する。

88.「解説」(『西洋哲学史』野田又夫著、ちくま学芸文庫、2017 年)

野田又夫のきわめて定評のある哲学史のテキストについて、その特徴と現代的意義を解説した。解説の中では、この哲学史の背後にある哲学の類型論を説明し、あわせて、この種の類型論が 19 世紀の西洋哲学の展開において形成されたものであること、さらには、その重要性が今日では忘れられていることを論じた。

89.「宇宙論における美的調和の導出」(『現代思想』45-5 号、2017 年)

宇宙論の構築におけるピュタゴラス的理想は単なるおとぎ話ではない。このことを、ケプラーの「メタ・アブダクション」の発想から確認する。

90.「ラッセルとポアンカレ――一つの分析哲学前史」(『現代思想』45-21 号、2017 年)

ラッセルとポアンカレの対立は無限にかんする集合論的理解への賛否として解釈されるのが普通である。しかし、両者は幾何学の経験論的基礎づけや確率論の解釈においても対立しており、これらの論争も現代的な観点から再考されるべきであることを論じる。

91.「エミール・ブートルーの思想」(『龍谷大学論集』492 号、2018 年)

ブートルーの思想の意義を、フランス共和制時代の思想の流れの中に位置

づけ、「自由の哲学」としてのその特徴を明らかにしようとした。

92.「ポアンカレの時間論」(『龍谷哲学論集』33 号、2019 年)

『科学と仮説』におけるポアンカレの空間論と時間論を「規約主義」として特徴づけたうえで、特に「同時性の測定」の問題をきっかけとして、彼の時間論がどのような方向へと向かったのかを概観した。

翻訳

1. D・D・ラファエル著『道徳哲学』野田又夫との共訳(紀伊国屋書店、1984 年)
2. イアン・ハッキング著『言語はなぜ哲学の問題になるのか』(勁草書房、1989 年)
3. フランク・ラムジー著『哲学論文集』橋本康二との共訳(勁草書房、1996 年)
4. チャールズ・パース著『連続性の哲学』(岩波文庫、2001 年)
5. ウィリアム・ジェイムズ著『純粋経験の哲学』(岩波文庫、2004 年)
6. チャールズ・テイラー著『今日の宗教の諸相』佐々木崇、三宅岳史との共訳(岩波書店、2009 年)

(2019 年 10 月末日現在)